

## Special Contents

## 立教GPの総括と展望

立教GP委員長 法学部教授 原田 久

読者の皆さん、“GP”といえば何の略語だと思われますか？  
筆者は、“GP”という文字を見たり聞いたりすると、どうしても鈴鹿サーキットやモナコ市街をレーシング・カーが駆け抜ける、あのF1グランプリ(Grand Prix、GP)を真っ先に想起します。おそらくは、学生時代、眠い目をこすりながら夜遅くまでテレビにかじりついていたからでしょう。

しかし、7月22日に開催された「立教GP(Rikkyo University Promotional Fund for Good Educational Practice)」の2009年度の報告会でも、他学部・研究科等に先駆けて教育改革のロードを疾走する6つのプログラムの活動状況が報告されました。筆者は途中から参加いたしました。かのサーキット場に負けずとも劣らぬ熱気に包まれた質疑応答が展開されていました。以下では、立教GPの2009年度報告会の開催状況と立教GPの課題について述べたいと思います。

立教GPとは、学内の教育活動を奨励するために設けられ、各学部・研究科・事務部局において行われている取組をさらに発展するよう奨励し、大学全体のいわば財産として共有するという立教大学独自の仕組みです。他大学との比較でいえば、各学部・研究科のみならず事務部局による(共同)実施も可能であること、一定の予算規模を用意していることに特徴があります。文部科

学省等において採択された競争的外部資金によるプログラムを継承・発展させるプログラムをも、助成対象に加えています。

実際に採択されて取組が進められているプログラムは、2009年度については6件、2010年度については3件です。そして、2011年度につい

ては1件が採択されています。合計すると10件の改革プログラムが実施あるいは構想され、しかも学部・研究科のみならず、新座キャンパス事務部、キャリア教育オフィス、図書館、及び、メディアセンターといった各部局まで加わり、教育改革の裾野が広がっています。全体としては、順調に展開され、一部のプログラムでは、講義教材をまとめてテキスト出版等に至るものも現れています。

他方で、前例のない先駆的な取組故に一定の効果を生じさせ

中面へ →



## CONTENTS

- 1 立教GPの総括と展望
- 2 後期シンポジウム報告  
「大学生の社会的・職業的自立に向けた教養教育の在り方」
- 3 2010年度FDワークショップ  
「授業見学」報告(第2回、第3回)
- 4 刊行物のご案内
- 5 紫緑談義「自分の頭で考えるということ」
- 6 編集後記



るには至っていないプログラムも一部存在します。

今後、立教GP委員会は、助成された上記10件の取組の成果を積極的に広報し、浸透を図っていきたいと考えています。同時に、小規模な取組への支援の可能性を探り、また、一定の成果を上げた取組について、採択期間終了後に全学的に取組を拡大する財政措置を講じることの可能性についても検討したいと考えています。立教GPの支援を受けた取組が全国的レベルの教育改革においてGrand Prixをとれるよう、立教GP委員長として願っています。



後期シンポジウム報告  
(2010年10月26日開催)

## 大学生の社会的・職業的自立に向けた 教養教育の在り方

センター員/法学部教授 小川 有美

10月26日(火) 18:20-20:00に、池袋キャンパス太刀川記念館3階多目的ホールにて、大学教育開発・支援センター主催シンポジウム「大学生の社会的・職業的自立に向けた教養教育の在り方」が開催されました。その背景として、近年、大学生の多様化や厳しい雇用状況の中で、大学における学習と職業生活との接続が緊急の検討課題となっているという事情があります。大学として、学生の社会的・職業的自立を育む教育を考える際、重要な役割を果たしうるのが教養教育です。そこで、大学生の社会的・職業的自立やこれを促す教養教育の在り方に関する課題や情報を共有する機会として、本シンポジウムを企画しました。



プログラムでは、まず藤田英典・文学部教授(日本学術会議大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会教養教育・共通教育検討分科会委員長)による講演があり、日本学術会議の「21世紀の教養と教養教育」報告書と質保証の在り方検討委員会の第二部の基本的内容から、現代社会の構造変容と大学教育の課題、問い直される知と教養の在り方、市民的教養と社会的・職業的自立をはぐむ教養教育というテーマまで、幅広く、また根本的な視点からの解説があたえられました。次に渡辺三枝子・ビジネスデザイン研究科教授/総長室調査役(中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会委員)、松本茂・大学教育開発・支援センター副センター長/経営学部教授による指定討論が行われました。その



中では、雇用不安や社会の変化への対策としてキャリア支援が取り上げられているのは危機的な姿で、むしろキャリア教育というのは、若者が自分の視座を獲得し、視座の違う人間と共に社会を築いていくための土台づくりではないか、また最近よく言われる「〇〇力」というのは、教養教育にとってマイナスの影響を与えているのではないか、教養教育がコアであり、そのコアを生かすために専門性をつけなければいけない、そのような意味で「専門性に立つ教養人」という立教大学の方針は広く認められてよいのではないか、というコメントが示されました。

参加者は、本学教職員、学生、一般の方を合わせて50名を越え、討論の時間ももっとあってもよい、次の機会が望まれるとの高い関心がうかがえるシンポジウムとなりました。



※シンポジウムの詳細な内容が記録された、大学教育開発研究シリーズNo.13「大学生の社会的・職業的自立に向けた教養教育の在り方」は、2011年2月の発行を予定しています。

第2回 [11月22日開催]  
大石 和男 教授 (コミュニティ福祉学部)

「知識を知り、自分を知り、実践する」ための工夫

「からだの科学」(全カリ総合A)

本授業は、全学共通カリキュラムの総合教育科目の一つで、「4. 心身への着目」のカテゴリーに属しています。授業は、履修者約200名の大規模なクラスサイズで実施されています。日常生活を送る上で役立つ「からだ(身体)」にまつわる知識やスキルを学生が効果的に習得するよう、工夫を凝らした講義が行われています。

見学日には、「タイプAの行動様式」をテーマに講義が行われました。タイプAの行動様式の特徴や問題点、タイプA的な行動の背景、その修正方法などが、具体例とともに分かりやすく説明されました。前回の授業において、学生はすでにタイプAのチェックテストを行っています。自分自身を客観的に分析できるようなテストを盛り込み、授業でその結果を基に、自分の日ごろの行動を評価させ、より健康を保てるよう実行させること、このことを常に心掛けていると、大石先生はおっしゃっていました。学生は、タイプAに関する知識だけでなく、自分の行動変容のきっかけを掴むことを授業において期待されているのです。

500人規模の授業担当も経験されている大石先生が大人数講義において行っている工夫としては、心理的に学生と隔絶しないよう「学生の中に入っていくこと」が挙げられました。授業の中で学生に質問をし、挙手をさせたり、自分の行動をチェックする様々なテストを行いながら、学生の中に入っていき、講義中の大石先生は、教室の前方だけでなく、後方や左右へと座席の脇を歩きながら学生とコミュニケーションをとり、反応を直に受け止めながらお話をされていました。

心理的に学生と隔絶しないようにする、という大石先生のポリシーは、遅刻者を全く罰しないということにも表れています。授業に出席することへの緊張感を学生がもたないよう、遅れても出席しようと思えるよう、授業への敷居を低くしているとのことでした。

意見交換会では、タイプAについて、さらに踏み込んだ話をうかがうことができました。話題は最近の学生の傾向にも及び、参加教職員の経験も交え活発な議論が行われました。



第3回 [11月30日開催]  
山本 博聖 教授 (理学部)

「理系」型科目は壁か?でも自然のすばらしさを理解してほしい

「地球の理解」(全カリ総合A)

本授業は、全学共通カリキュラムの総合教育科目の一つで、「5. 自然の理解」のカテゴリーに属しています。授業は、履修者約300名の大規模なクラスサイズで実施されています。「理系科目は難しい」と感じがちな学生に対して、かけがえのない自然への理解を深めるための工夫を凝らした講義が行われています。



毎回の授業の冒頭では、前回の授業中に学生が書いたコメントカードに対する回答や解説が行われます。これによって学生は、すでに学んだことの理解を深めるだけでなく、これから学ぶことに備えることができます。見学日には、「全球凍結」をテーマに講義が行われました。原生代後期氷河期に地球は、「スノーボール・アース」という状態であったという仮説と、この仮説が提起された背景について、ひとつひとつ疑問を解きほぐしていく仕方で説明が行われました。学生は、パワーポイントを用いた口頭での説明を聞いた後で、スノーボール・アースを映像とともに説明するビデオを鑑賞します。山本先生は、このような映像資料の他、関連する新聞記事や写真、図書を紹介したり、説明の際に日常的な例を用いることを心掛けているそうです。こうしたことが、「理系」型科目に苦手意識を持っている学生の興味や関心を引き、学習意欲を高めることにつながっているのです。

大人数講義において、快適な授業空間を作るために、山本先生は15分以上の遅刻者が教室に入室することを禁じています。また、私語をする学生にも厳しく、即刻退室をさせるなどの対応をとられています。これによって、学生は静寂を保った教室で、私語に悩まされることなく講義に集中することができます。

意見交換会では、山本先生から授業準備に関する詳細な説明をうかがいました。参加教員は、「理系」型科目がどのような意味で壁であり、その壁をどのように克服したらよいかについて議論を行いました。理系学生と文系学生の違いなども含めて、熱心な討議が終了間際まで続きました。

## 大学教育開発研究シリーズ No.12 「グローバル化に対応する大学教育の在り方」

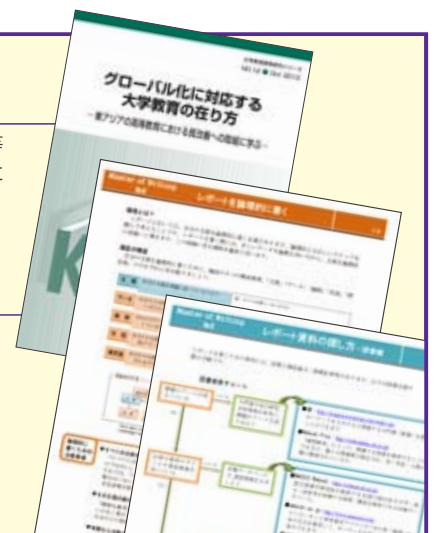
2010年7月13日に開催したシンポジウム「グローバル化に対応する大学教育の在り方—東アジアの高等教育における質改善への取組に学ぶ—」の記録冊子を発行しました。シンポジウムの詳細が資料とともに掲載されていますので、ぜひご一読ください。

### リーフレット〈Master of Writing〉 「レポート資料の探し方」「レポートを論理的に書く」

初心者向けにレポート等の書き方を伝えるリーフレットを作成しています。新たに、「No.5 レポート資料の探し方」「No.6 レポートを論理的に書く」を開発しました。これまでに、「No.1 レポートとは」「No.2 レポートの構成」「No.3 引用・参考とその表記法」「No.4 メールのマナー」を発行しています。これらのリーフレットは、池袋キャンパス大学教育開発・支援センター前、新座キャンパスで配布している他、下記URLからもダウンロードできます。

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/journal/leaflet/>

今後、パラグラフやアウトラインの書き方等に関するリーフレットを発行していく予定です。



# 紫 縁 談 義

法学部長  
角 紀代恵 (かど きよえ)



## 自分の頭で考えるということ

「就職氷河期の再来」といわれる昨今ですが、短くない大学教員生活をふりかえてみますと、「売り手市場」のときであっても「買い手市場」のときであっても、これだと思う学生は、比較的すんなりと内定を決めてくるように思います。つまり、いつの世であっても、社会が大卒者に求める「能力」とか「人物像」というものは、あまり変わらないようなのです。

では、それは何か?ひとこと言えば、「自分の頭で考える能力」ということになるのではないのでしょうか。

企業であれ、官庁であれ、大卒者は、新人の間はともかくとして、一人前の仕事をまかされるとなると、「マニュアルどおりに体を動かすだけ」では終わらない職務を全うすることを求められます。つまり、「応用問題を解く」ことが必要となるわけです。もちろん、「想定外の事態に対しては、自分だけで判断せずに上司の判断を求める」というのも応用問題の立派な解のひとつです。また、変化が激しい昨今では、「知識」「情報」はすぐに陳腐化しますので、常に新しい知識をとり入れ、それを体系化する方法論が必要です。

大学教育が高校までの教育と違うのは、「自らが学びたいことを選択して履修する」システムであるということです。世界最古の大学、ボローニャ大学の起源は、学生たちが師事したい教授を自分たちでお金を出し合って雇うための組合にあるという話を聞いたことがあります。まさに「自ら学びたいこと、学びたい人」を選ぶやりかたです。現代の大学では、学部・学科によっては履修科目がかなり決まっていますが、そもそもその学部・学科を選んで入学するわけですし、ゼミなどは「学びたい人」も選ぶシステムであるわけです。教育を「与える」機関ではなく、自立した学生が学問を「求める」機関であるのが、大学の本質といえましょう。そのようにして何かを学んだ経験が「自分の頭で考える能力」を培い、応用問題を解ける能力と、知識を取り入れ、体系化する方法論を身につけさせることになるのだらうと思います。

「求めて学び、思考力を養う」ということに関しては、専門科目は勿論のこと、教養科目、いわゆるリベラルアーツも非常に重要であると私は思っています。旧制高校では3年間かけてやってきました。まさに自由(リベラル)に学びたいものを学ぶことです。

特に外国語は重要です。ただ、「話せない英語は無意味だ」などというのは妄言にすぎないと私は思います。言語は思考の出発点であり、思考そのものです。異なる言語を学ぶという体験こそ、異なる文化、歴史、思考方法を学ぶことの入り口になるものです。今後、どんどん日本は「小国」になってゆくことでしょう。そのような世界で生き抜く次世代を育てるためには、たとえば、「英語、中国語、アラビア語の3つを必修科目にすべきだ」といった議論があってもよいと思います。もちろん、その場合の必修とは「べらべらになる」ことを目的にするわけでないことは、いうまでもありません。

編  
集  
後  
記

本年度は、FDワークショップ「授業見学」を3回実施することができました。開催にご尽力頂きました授業担当の先生方、並びに熱心に意見交換を行われた参加者の皆さまに心より御礼申し上げます。

本号から新たに、コラム欄「紫縁談義」を設けました。学内の教職員の皆様に、大学教育に関わる内容を個人のお立場で述べて頂く欄です。教育に関する多様なご意見を共有していくきっかけとなりましたら幸いです。(久保田)

## 「MOVE 第7号」

立教大学 大学教育開発・支援センター ニューズレター  
2011年1月25日発行

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター  
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1  
Tel: 03-3985-4623 Fax: 03-3985-4615  
E-mail: cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>